Osaka University Knowledge Archive

Title	マハーデーヴィー・ヴァルマー作「思い出の1シーン」及び「記憶の糸」より
Author(s)	松木園, 久子; ヴァルマー, マハーデーヴィー
Citation	印度民俗研究. 1995, 9, p. 27-49
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/50302
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

マハーデーヴィー・ヴァルマー作
「思い出の1シーン」及び「記憶の糸」より

マハーデーヴィー・ヴァルマー

ラーマー

バクティン

訳・注　松木園　久子

ラーマー

ラーマーが家にやって来たのはいつのことだったか、私は断言できないし、弟妹もそうだろう。子供の頃、私たちはいろんなものの詰まった父の机を見慣れていて、しんと静まり返る昼下がりにはその下はおもちゃの世界となっていた。鉄のスプリングのついた大きなベッドをよく知っていて、そこに私たちが寝た姿は亀か魚の化身のようだったろう。法螺貝や鐘のついた、母の神様の像をいつも見ていて、そのお供え物を頂戴しようと、うす目を開けてサギのようにねらいすまして鐘のチーン、チーンという音を数えていた。そうしたものと同じように、ちびで色が黒く、体つきのがっしりしたラーマーの大きな足の爪から長いまげにいたるまで、気が付くと私たちのそばにあった。

ラーマーの、蛇の腹のように白い手のひらと、曲がりくねって節くれたった木の枝のような指をした手の一本一本の皺を、私たちは知り尽くしていた。というのも顔を洗ってから寝るまで私たちとラーマーの戦争は続き、休戦協定はお話を聞くときにしか成り立たなかったからである。てんでばらばらの方向を向いた家族さながらの十本の指をまとめている家長の如き黒いがっしりした足、その足音まで私たちは聞き分けることができた。というのも何かいたずらをしてこっそり逃げても、まるで羽根が生えたかのように私たちの隠れているところまで飛んで来るのだったから。

子供の頃の記憶には不思議なところがある。落ち着いて、穏やかな気分でいるときには、過去の輪郭は霧の中からものが現れるように、ひとりでにだんだんと姿を現して来るのだが、役に立つものだからと考えて、思い出そうと身構えているときには、水面の藻が石を投げると一旦は離れるがまた集まって来るように、繰り返し繰り返し忘却の陰に隠れてしまうのである。

ラーマーの狭い額の黒々とした濃い眉と小さな優しい目は、時折記憶のスクリーンに浮かび上がるのだが、また霞んでいきながらいつの間にかすっかり姿を消してしまう。疲れていらいらしている職工が仕上げを失敗したかのような格好の悪い低い鼻や、息を吸ったときに広がったままになったような鼻の穴、屈託のない笑みを湛えて膨らんでいるような唇、それから黒い石のカップの中に入っているヨーグルトを連想させるようなびっしり並んだ白い歯などをとってみても、このことは真実である。

ラーマーは髪は伸ばさないものだと決めていたので、私たちはそこだけ長いまげも平等にしてやろうと鋏を持ち歩いていた。しかしそれは猫の首に鈴を付けるよりも難しいことだった。というのもそのまげの持ち主は私たちが起きているときには寝ていることがないし、彼が起きているときには私たちにそんな儀式を行う勇気は起こらなかったのだから。

恐らく今となってはラーマーは格好が悪かったと言うべきなのだろうが、その頃は彼よりも格好の良い遊び相手がいるなど、想像だにできなかった。

正に生命こそが美の真髄である。しかし容姿が整っていないときは、外見の美しいときほどに我々は心を動かされない。我々は外見の姿が様々であるのに惑わされるにつれて、その根底にある生命を忘れてしまうのである。子供は色々な外見の姿をまだあまり見慣れていないからこそ、生命を感じ取るのである。生命の中から愛情や優しさの光りが放たれているのを感じ取るとき、人は容姿のまずさを気にとめない。憎しみ、嫌悪などのもやで生命が隠されていると、外見の美しささえも理解できないものだ。

だからこそ私たちはラーマーをとても素敵だと思っていた。彼も自分が不細工だとは気づいていなかったのだろう。というのも肌着一枚に膝までの短い腰布を巻いて、醜い姿を人目に晒していたのだから。彼はお洒落をするのに要るものに不自由はしていなかった。というのも部屋では裏地付きの長いシャツ、巻いた形になっているターバン、ブンデールカンド風の靴[1]に節のある杖が、何かおめでたい時を待っているかのようだったからである。それらがいつまで待ち続けていてもきっとラーマーは完全に無視するだろうと思い、たまらずに我が実行委員会においてこの案が常に全会一致で可決されるのだった、すなわちシャツの袖に杖を通しておもちゃのカーテンを作るべし、カゴみたいな形になっているターバンを壁に吊るして人形のゆりかごとなる名誉を与えるべし、ブンデールカンド風の靴は水槽に浮かべて人形の水遊びのための船にすべし、と。しかしラーマーは自分の暗い城にギーッと音を立てて扉を閉め、私たちが椅子に乗っても襲うことができないくらい高いところに掛け金をかけてしまうのだった。

ラーマーがやって来たときの話を私たちは大きくなってから聞いたのだが、それは彼その人と同じくらい変わったものだった。ある日の午後、母がバリー[2]やパーパル[3]などをいっぱいに広げて日干ししていると、いつの間にか力尽きて疲れ果てたラーマーが戸口に座って門扉に頭をもたせかけ、ぐったりしていた。乞食だと思って母がそばへ行って声をかけると、ラーマーは「ああ、おくさん。ラーマーは腹が減って死にそうなんです」と言って母の足元に倒れて込んでしまった。薬の代わりにミルクやお菓子などを与えて母がラーマーを生き返らさせると、問題はさらにややこしくなった。というのも空腹というのはいつか治療が終わるような病気ではないからだ。

そのブンデールカンドの村の少年は継母のひどい仕打ちから逃げて物乞いをしながらインドール[4]までやって来たものの、身寄りもなければ住む処もなかった。こんな場合ラーマーが自然と母の同情を引いたとしても何の不思議もなかった。

その日の夕方、父が帰ると、薪を置く部屋の片隅にラーマーの大きな靴が休んでおり、

---

[1]ブンデールカンドはウッタルプラデーシュ州からマディヤプラデーシュ州にかけての地方名。

[2]ジャガイモ、トウガンなどを混ぜたタチナタマメやインゲンマメ等の豆の粉を小さな団子状にして、油やバターで揚げ、乾燥させたもの。香辛料または調味料として用いる。

[3]インゲンマメなどで作った薄い煎餅。

[4]マディヤプラデーシュ州西部の同名県の県都。中央インドの重要な商工業都市。綿紡績業が盛ん。(「南アジアを知る事典」平凡社)

もう片隅には杖が瞑想を行っていた。そして身繕いをし、新しく奉公生活に入ったラーマーがあたふたと自分の仕事の内容と範囲を理解しようと必死になっていた。

父はラーマーの不細工さに呆気に取られた。笑いながらきいた、「こりゃどこの世界の生き物をつれて来たんですかね、大黒さま」母のせいで家はちょっとした《動物園》と化していた。父が帰って来ると、ある時はびっこの乞食が外のベランダで何か食べていたり、またある時は盲の門付が裏口でタンバリンを鳴らして賛歌をうたっていたり、ときには近所の貧乏な子供が新しいシャツを着て中庭で跳びはねているのが見られたり、またバラモンの老婆が米蔵の入り口で穀物を着物の端にたくし込んだりしているのが日常茶飯事だった。

父は母が何をしても決して文句を言いはしなかったが、からかって喜んでいた。

父はラーマーのことも一時の客と思っていたのだが、母は咄嗟に返事が思いつかず、焦るあまりこう言ってしまった、「私の仕事で使うために特別にこの子を置くことにしましたの」

使用人が何人もいるのに一時も休まない人が自分のためだけに使用人を置くとは、それだけで少なからず驚くべきことであるのに、しかもこんな不細工な使用人とは。父は息苦しくなるほど笑った。面白がってこう言った、「結構なことですねえ、不信心者でも恐れるような、こんな特別あつらえの使用人でなければ大黒さまにお仕えなんてできませんからね」

父は素性の知れぬラーマーを信用できなかったが、母と議論するのは無駄であった。というのも母は、自分が持って生まれた人を見る目だけが、人を信頼できるどうかはかる物差しだと思っていたのだから。ラーマーの不細工な見てくれの陰に隠された素直な心根を母の優しい心は読み取った。そこにいつまでも変わらない清い心がないなどと母は疑うことすらなかった。

このようにしてラーマーは家に住むことになったのだが、彼の仕事を決めるという問題はまだ解決していなかった。

どの仕事にも古くからの使用人がいたし、礼拝や台所仕事を母が誰かに任せるなどということはあり得なかった。灯明を使ってのお祈りや礼拝などには自己流のやり方が決まっていて、例外はあり得なかったし、食事の用意に関しても同じことだった。

お祈りが自分の魂にとって不可欠であるのと同じように、手ずから食事を作ることが私たち子供の体のために絶対に必要であると母は固く信じていたのだった。

私たち弟妹は互いに二つずつしか年が離れていなかったので、して良いことと悪いことが分かるようになる時期にあまり差はなかった。供儀をぶち壊そうと常に隙をねらっている悪魔のように、私たちは母の大切な儀式をことごとく邪魔しようと待ち構えているのだった。そこでラーマーに私たち悪戯っ子を押さえ込む大任を任せて、母は少し安心することができた。

ラーマーは朝早く礼拝室を掃除し、そこにある道具をレモンでピカピカに磨いた—そ

れから私たちを起こしに来るのだった。あの大きなベッドの上で朝まで私たちの頭と足は何回向きを変え、位置を変えていたか知れない。誰かの首を誰かの足が押さえていたり、誰かの手に誰かの体が乗っていたり、誰かの背中が壁になって誰かの息を止めていたりしていた。何がどうなっているのかきちんと知るために、ラーマーはごつごつした手でそっと掛け布団やカバーの上を端から端まで探って来て、ある子は膝という車に、またある子は肩という馬に乗せ、または歩かせて、洗顔というお祭騒ぎをしに連れて行くのだった。

私たちに顔や手を洗わせることは容易なことではなかった。なぜならラーマーは「ミルクと砂糖菓子を王様、どうぞ召し上がれ」という文句を大事な呪文のように唱え続けていなければならなかったうえ、私たちは互いに自分以外の子が王様になることを許そうとしなかったからだった。ラーマーが私を王様にすると、小さい弟は小鳥の嘴のような口を開いて言うのだった、「マーマー、どうちておねえちゃんをおうたまにするの」ラの発音さえできない小さな子が一人前の口をきくのが、私にはどうしても我慢ならなかった。ラーマーの片手は指で私の頭を包囲するかのように捕まえていて、もう一方の手は三本の深い皺のある手のひらでヴィシュヌ神の武器の円盤のように私の顔の上を汚れはないか探してくるくる回っていた。こんな苦しみに耐えていても、他の子に王位を認めるのは自分が能なしだということを堂々と触れ歩くようなものだった。それで私は甘えたり、すねたり、意地悪をしたり、騙したりと、ありとあらゆる手管を用いて私だけを王様にするようにラーマーに無理強いをしていた。ラーマーはこんな戦士たちを満足させる殺し文句を知っていた。ラーマーは私の耳元でそっと言うのだった、「お嬢ちゃんが大きな王様だよ、ちびちゃんじゃないよ」そして恐らく当のちびの耳にも同じことを言ったのだろう。というのも弟はいそいそと歯磨き粉の中に指を突っ込んで、歯ではなくて唇を擦りだすのだったから。そんなことをラーマーが見逃すはずがなかった。それで私は、弟を将軍の命令に背いた馬鹿な兵隊みたいだと思いながら悠々と見下ろしていた。

それから私たち三体の像は一列に安置され、ラーマーが大小のスプーン、ミルクのカップ、果物ののった皿などを持って来て、この一風変わった、それぞれに自分が一番偉いのだと証明しようとむきになっている神々を宥めるために前に座るのだった。しかしラーマーの方も慣れた神主であった。どんな修行を積んだおかげか分からないが、神々に目を閉じて、カラスさんからお供え物を食べることに夢中にさせるのだった。私たちが目を閉じた途端にある子の口には葡萄、ある子の歯の間にはビスケット、またある子の唇にミルクのスプーンがやって来る。見ていない振りだけはしていたものの、私たちは皆目を半開きにしてラーマーの黒く、太い指の見事な動きにじっと見とれていたのだった。それに本当のところ、私はカラスの黒くて硬く、見たことのない嘴がこわかったのだ。もしうす目を開けてカラスとその嘴という.ことになっているところにラーマーの手と指を見つけられなかったら、私はお供え物への欲など捨てて逃げていたに違いない。

食事という行事が終われば、それでラーマーの苦行が終わるわけではなかった。体を

洗う時は目を石鹸の泡で泡だらけにしたり、耳を乾いた島にさせないこと、服を着る時はだらし無い着方をしているところに問答無用の規則を守らせること、食事の時には食べる物の量と食べる人の限界に過不足がないようにすること、遊ぶ時は必要に応じて私たちの象、馬、空飛ぶ円盤などの代わりになること、眠る時は私たちの上で羽のように手を広げて、お話しを聞かせ、夢の世界の扉まで送り届けることがラーマーの役割だった。

私たちに対するラーマーの愛情が底無しであった分だけ、私たちのラーマーに対する意地悪も限りないものだった。ある日ダシャラーのお祭[5]の市を見たいとだだをこねると、ラーマーは母を拝み倒してやっとのことで少しだけ私たちを連れて行っていいと許しを得た。おもちゃを買うために一人を肩に乗せ、もう一人は抱っこし、そして私には指を握って何度も言った、「指を離すんじゃありませんよ、王様」頷いて約束している最中に私は指を離して市を見ようと決めた。歩き回り、押し潰されそうになりながらお腹が空いてみると、ラーマーのことを思い出すのは自然なことだった。一軒の菓子屋の前に立って、私は困っているのを精一杯隠しながらきいてみた、「ラーマー見なかった？いなくなっちゃったの」菓子屋のお爺さんは濁った目で優しくこう尋ねた、「おまえさんちのラーマーってどんなだい」私は唇を噛んで自信を持って言った、「とてもいい人よ」こんな説明でラーマーを見つけるのはどんなに難しいかを恐らく考えたのだろう、お爺さんはしばらくそこで休んで行くようにと勧めてくれた。私は負けを認めたくなかったが、足は疲れ果てていたし、お菓子の並んだ盆に少なからず心魅かれていたこともあって、店の片隅に敷いてあるゴザにいっぱしの客の顔をして座り、お爺さんにもらった菓子をまるでお供え物かのように食べ、自分の大旅行の話を聞かせ始めた。

一方、私を探していたラーマーは生きた心地ではなかった。夕方誰彼なく尋ねてやっとのことでラーマーがその店の前までたどり着くと、私は勝ち誇って威張って言った、「あんたったらそんなに大きくなっても迷子になるなんて」青ざめていたラーマーの顔に露の雫のようなうれし涙がこぼれた。ラーマーはまるで私が体の一部を市に落として来たかのように、私の体をくるくる回してくまなく見た。家へ帰って分かったのだが、大人の辞書では子供のこういう勇しさは罪というのだそうだ、しかしラーマーが私の罪を被ってお小言も耐えてくれ、私たちを寝かせつけるときには、ラーマーは特に私に向けて、優しくあやしてくれた。

あるとき、自分のものと他人のものの微妙で難しい違いにラーマーは明確で見事な注釈をつけたことがあった。さあ、それからというもの、どこからどんな他人のものを持って来たら、ラーマーは裏切られて小さな目を丸くするだろうか、こう思うと私たちの頭は急に働きだした。

私たちの家とタークルさんの家はくっついていて、屋上を伝って行き来できるようになっていた—とは言っても二十センチくらいの幅の低い壁があるだけで、そこから足を

[5]アーシュヴィン月（9～10月）の満月に向けて10日間行われる。秋の始まりを祝う祭で、秋まきの小麦の予祝を含み、またそれぞれの家業で用いる道具を供養する仕事納め、仕事初めの要素ももつ。（「南アジアを知る事典」平凡社）

滑らせば、地獄まで一直線だった。

その家の庭の花は他人のものという語義に当てはまる、そう決めると私たちはある日の午後、ラーマーをからかうためだけに、例の空からの道を通って花を盗みに行った。誰か一人でも足を滑らせていたら話はまた違ったものになっていたところだが、運よく私たちは隣の家の屋上へ上手く移った。下の階段の最後の段に牝犬が小さな子犬たちを抱いていた。それを見た途端私たちは決めていた目標を変更せずにはいられなかった。しかし私たちが子犬を一匹つまみ上げると、優しそうな母犬が忽ち大変なけんまくで吠えだした。居間から慌てて旦那さんが出て来、寝室から眠そうに奥さんが駆け出して来ると、私たちはすっかり行き場をなくした。こんな場合にどうすべきか、ラーマーの注釈の中にはそんなことは触れられてもいなかったのだ。それで私たちは自分なりに考えて、すっかり目的をばらして言った、「私たち屋上を伝って花を盗りに来たの」旦那さんは笑いだした。こう尋ねた、「どうして持って行かないの」答えはもっと大胆だった、「でもやっぱり子犬を盗むことにしたの」子犬を抱いてちゃんとした道を通って帰って来るまでに、ラーマーは私たちの強盗の知らせを聞いていた。自分の教訓という甘露の木に毒の実が付いたのを見て、ラーマーはどうにもたまらなくなったのだろう。空から入った盗賊の首領の両耳を引っ張って宙に持ち上げてきいた、「言ってごらん、さあ、どこへ行ってたんだい」しゃくり上げて泣くなどということは私にとってあまりにも屈辱的だったので、唇を噛みしめて、初めてのお仕置きに耐えた。そして怒りをこらえながら母に言った、「ラーマーに引っ張られたから耳が歪んで、伸びちゃったの—ねえ、お医者さん呼んで治して、それでラーマーを暗いお部屋に閉じ込めて」母は私たちの仕業を知らなかったし、ラーマーも死んでも言うはずがなかった。それでラーマーは子供たちを虐待をしてはいけないという心理学的なお説教を聞くはめになった。ラーマーは自分のしたことを本当に恥じていたが、禁じようとすればするほど、彼の王様には耳の痛みが思い出されるのだった。それでも夕方ラーマーがしゅんとして外に座っているのを見ると、私は「お歌うたって」と言って仲直りを申し出た。ラーマーはひとつだけ賛歌をうたうことができた「シーター、ラーマ[6]を信じ給え」それも木の上にいるスズメやカラスまでもが飛んで逃げるようなうたい方だった。しかし、私たちはその前代未聞のうたい手の古今未曾有の聴衆であった—ラーマーは私たちのためだけにうたい、私たちは彼のためだけに聴くのだった。

私の子供時代は同じ年頃の女の子たちとは少し異なっていた。そのためにラーマーは私にとって特に重要な存在となった。

当時どこの家でも女の子は望まれていなかった。庭で歌を歌う女たち、戸口で太鼓を鳴らす者、そして家族は年寄りから子供まで皆男の子を望んでいた。ひそひそ声でラクシュミー女神たる女児誕生の知らせが告げられるや、家の隅々までがっかりと失望に包まれた。年配の女たちは合図をして歌を歌うことなく女たちに立ち去るように言い、年

[6]ラーマーヤナに出て来る王子と王妃。理想の夫婦とされる。

配の男たちは身振りで黙って楽器を奏でる者たちを帰らせるのだった—もし女の子を育てることが大変な家であれば、生まれて来たお客さんにそのままあの世に帰ってもらうのも当然のやり方だった。

わが家にいつかこんなことがあったのかどうか分からないが、長い間女神たる女の子が生まれなかったので誰もが心配し始めた。というのも馬がいなくては馬祇祭を行うことができないように、女の子がいなくては嫁入りという盛大な供儀も無理だからである。

随分待ち侘びて私が生まれると、祖父はそれをわが家の氏神のドゥルガー女神の御利益であると信じ、信心を表すために持ち前のペルシア語の知識を忘れてこんな大時代な名前を探して来た。その名前の偉大さのあまり誰も私のことをありふれた愛称で呼ぶ勇気がなかった。名前にふさわしくするために皆が子供のころから私の頭に知識を押し込もうとしたので、私が幼心に反抗したのは言うまでもない。無学文盲のラーマーの愛情に守られずには、私は人生の優しさを知り得ただろうか、これは疑問である。私は文字の練習板を習い終え、「アー」のところを指さしてアードミー（人間）の代わりにアーム（マンゴー）、アールマーリー（棚）、アージ（今日）などと好きなことを言うことができた。こんな風に私は弟妹にとって鬼教師シュクラーチャーリヤ[7]として重要だった。私は弟妹のやることなすことに対していちいち賛成、あるいは反論を本の中から捜し出す能力を習得した。そして私のこの能力のために彼らはいつも警戒していなければならなかった。小さい弟が跳び上がると、私は本を開いて「お猿が踊りを見せに来ました」と読んで聞かせたり、妹が膨れっ面をすると、「膨れっ面をした女の子はいうことを聞きません、怒鳴られて逃げて来るのです」と聞かせた。弟妹は可哀想に私の教養をとてもいまいましく思っていた、というのは私のすることに対して例を探す術を彼らは持ち合わせていなかったからだ。しかし字の読めるシュクラーチャーリヤが字の読めないラーマーにいつも負けていた。百冊の本にも入り切らないほどの物語、小説、諺などの大辞典を彼は自分の中に備えていた。それで私の教養が大ゲンカの原因になると、彼は正義の味方となって自分の決定を皆に聞かせてすぐに仲直りさせるのだった。

私のパンディット[8]先生に対してはラーマーも何も敵意を持っていなかったが、おもちゃで遊んでいる最中にマウラヴィー[9]先生や音楽の先生や絵の先生が現れると、ラーマーは不機嫌になった。恐らく私がこれほどの勉強の重荷に耐えられないだろうということを知っていたのだろう。

私はマウラヴィー先生が恐くて恐くてたまらなくなり、ある日勉強をさぼるために大きなカゴの中に隠れていたことがあった。運悪くちょうどそのカゴには祖父の送って来たマンゴーがまだ二、三個残っていた。それを出して何か他のものを入れようと、ラーマーがその重さに驚きながらも、カゴごと母の前に持って来ると、問題はとてもややこしくなった。ラーマーが蓋を開けたとたん、私には一目散に逃げ出す以外のことは何も

[7]悪魔の師とされている聖者。
[8]サンスクリット語などを教えるバラモンの教師。
[9]アラビア語やウルドゥー語を教えるイスラム教徒の教師。

思い浮かばなかった。結局ラーマーと母の尽力で私はウルドゥー語を学ぶことから解放された。

絵の先生は遊んでいるのを止めさせなかったので、私は何も不満はなかった。どの紙にも真っすぐに二本線を引いて、その上に丸を描いて、ラーマーの絵を描いたものだった—誰か他の人を描かなければならないときは、この同じ輪郭の中に多少手を加えるだけのことだった。

ナーラーヤン・マハーラージのことは私もラーマーも好きではなかった。最初の日に先生が歌を習うことについてきいたとき、私は自信満々にラーマーに習っていると答えた—そして先生に聴かせてくれと頼まれると、私がラーマーの例の賛歌を奇妙な身振りを交えて聴かせると、先生は言葉を失った。それでも先生が私の子守兼師匠であるラーマーを自分よりも偉い、上手な歌手であると認めなかったので、私が機嫌を悪くするのも当然だった。

ラーマーがいなくても世の中は成り立つ、などとは私たちのとうてい認めるところではなかった。母が二週間ほど祖母に会いに行くとき、ラーマーが家と父の世話をしなければならなかった。ラーマーが行かなければ私たちは決して行こうとしないので、母も私たちを置いて行くのだった。

病気に関してラーマーより献身的に世話をし、注意を払う人間はなかなか見つかるものではなかった。あるとき弟が天然痘にかかると、ラーマーは他の子供たちを二階に連れて上り、弟のことを思い出さないようにし向けておいた。私が一度も天然痘にかからなかったのはラーマーの用心のおかげだった。

その他にもラーマーのおかげで私は恐ろしい病気から助かったことがある。インドールでペストが流行していて、私たちは町の外に住んでいた。母とまだ何ヵ月にしかならない弟の病状がひどくて、父は私たち三人の心配をする余裕があまりないほどだった。こんなときにラーマーは私たちが何の不足も感じないように、優しく守っていてくれた。

生い茂ったマンゴーの枝にかけたブランコに乗って、ラーマーの不思議なお話を聞くのに私たちが夢中になっていたころのこと、ある日微熱とともに私の耳もとにできものができた。ラーマーは、あるお婆さんの腫れた足から神様が勇敢な蛙を産み出したというお話をしたことがあった。私はラーマーにできもののことを教えた、「私の耳からお話の蛙が出て来そうよ」ラーマーは可哀想に跳び上がった。そして熱い煉瓦のかけらを濡れた布にくるんで、何度できものに温湿布をしたことか分からない。温湿布をしながらラーマーは何かしらつぶやいていて、女神や、ハヌマーン[10]やら別の神様の名前が聞こえて来た。二日二晩ラーマーは私の枕元を離れなかった—三日目に私のできものは治まったが、ラーマーの方がひどい熱を出した。できものができて、切開され、自分の病状はとてもひどかったのに、ラーマーは私が苦しみからすっかり解放されたことに満足していた。衰弱したラーマーの枕元に母が私たちを連れて行くことができるようになっ

[10]ラーマーヤナに登場する神猿。ラーマ王子への忠誠心が深いことで有名。

たとき、私たちを見たラーマーの様子はまるで乾いた唇に笑みがこぼれ、くぼんだ目は喜びで輝き、ぐったりした体にさっと生気が差したようだった。母は言った—「お前がこの子を助けてくれたのよ、ラーマー！もしお前を助けられなかったら、私たちは一生後悔するわ」それに答えてラーマーは爪の伸びた手で母の足に触れ、目元を拭いだした。ラーマーが元気になると、母はいつもこう言うようになった—「ラーマー、もう身を固めて、それで自分の子供をもうけなさいよ」「女房なんて。ガキなんか欲しくはねえですよ。おらの嬢ちゃんたちさえ幸せなら、ラーマーは思い残すことはねえんですよ」ラーマーの返事はいつもこうだった。ラーマーはまだ生まれてもいない自分の子供のことについて度々話していたので、私たちは想像上のラーマーの子供を知っていただけでなく、彼らを自分たちのライバルと見なしていた。私たちは、もしラーマーの子供が私たちみたいだったら、決して死にぞこない、面汚しなどと言うわけはないと信じていた。

そしてある日、自分の部屋から杖や靴などを出して、ばら色のターバンを巻いてラーマーが庭に立っているのを見て、私たちは皆こわくなった。というのもこんなに着飾ったラーマーを私たちは見たことがなかったのだから。杖を疑わし気にじろじろ見て、私はきいた—「あの子たちを叩くつもりなの、ラーマー」ラーマーは杖を振り回して笑いながら答えた—「そうだよ、王様。あの死にぞこないどもにこうしてやるんだよ」しかしラーマーは行ってしまい、何日もの間私たちはカッルーのおばさんのごつごつした手から逃れるために常に新しい方法を考え出さなければならなかった。

私たちにとっては永遠とも言えるが、他の人にとってはほんの数日後のある日、朝早くサフラン色のターバンとばら色の腰布をまとったラーマーが戸口に立っていて、「王様、王様」と呼んでいた。私たちは皆一目散に駆け出したが、ベランダでぎくっとしたきり棒立ちになってしまった。ラーマーは一人ではなかったのだ。その後に赤い腰布を膝までたくし上げ、手には腕輪、足に鈴のついた足飾りを付け、ヴェールを被った女の人が立っていたのだ。私たちは好奇心と同時に疑惑の念にかられた。

妹がラーマーのシャツをつかんで揺さぶりだすと、鼻先に触れているヴェールの奥から二つの鋭い目が妹の動きを無言のまま制止していた。弟がラーマーの肩に乗りたいと駄々をこねると、ヴェールに隠れた頭が禁止しているように震えているのが分かり、私が屈み込んで新入りの顔を見ようとすると顔をそむけて立ち上がった。こんな客を私たちが歓迎するはずがあろうか。時が経つにつれ、ラーマーの暗い小屋でケンカが始まり、私たちの遊びの世界に干ばつが起こる可能性が増大した。私たちのおもちゃの町を作るためにラーマーは創造神ヴィシュヴァカルマー[11]であり、同時にマヤ[12]でもあった。しかし今やラーマーにはその大任を果たしている暇はなかった。ラーマーがやって来ると、ヴェールを被った女が後から必ずついて来て、むすっとしてそっぽを向いているので、私たちやラーマーだけでなく、人形たちをも息苦しくさせるのだった。そんなわけである

[11] 世界創造の神。
[12] 建築を業とする悪魔族の一員。

日、私たちは作戦会議を開いた。王様というのは高いところに座るものである。私は机に上って床まで届かない足をぶらぶらさせて座り、大臣殿は椅子に座り、将軍殿は腰掛けに座った。そして王様は険しい顔をして言った—「ラーマーはどうしてあの女を連れた来たのじゃ」大臣殿は重々しく首を振りつつ、繰り返して言った—「ラーマーはどうしてあの女を連れた来たのじゃ」そして将軍殿はちゃんと喋れないのをを隠すために目を怒らせて言った—「ほんとにどうちてあいつをつれてきたの」

そしてその奇妙な会議によって、私たちの至上の権利を踏みにじる者は正義を守るために罰せられるべきであるとの結論が全会一致で決定された。この任務は法に従い、将軍殿に任された。

ラーマーの奥さんがパンを作っていると弟は台所にこっそりビスケットを置いて来、沐浴をしていれば、棒切れで乾いた腰布を落としてやるのだった。こんな風にして奥さんはどれほどの罰を受けたことだろうか。しかし彼女の方から許しを乞うでもなく、和解を申し出るでもなかった。ただ彼女はますます頑固に敵対し始め、私たちがした悪さの仕返しを可哀想にラーマーが受け始めた。彼女の色黒の顔は絶えず厳しい表情に覆われていたし、黒目に怒りの色が消えることはなかった。それで私たちのように無邪気なラーマーも始めは困っていたが、そのうち憂鬱になり、ついには逆らい始めた。恐らくラーマーは自分の全時間と全愛情をその女にどうして捧げなければならないのか、そして捧げたら自分はどうやって生きて行けばいいのか、分からなかったのだろう。そしてある日ラーマーの奥さんは怒って実家に帰ってしまった。

ラーマーはというと、まるで自分の気に入らない束縛から解放されたようだった。というのは私たちの素晴らしい世界の、永遠に幸せな主に再びなって、奥さんのことは地面に水で描いた線のように忘れたからである。

しかし間違ったことは何であっても母には許せなかった—ラーマーが奥さんを私たちの古いおもちゃのように捨てるなんてひどすぎると母は思い、ラーマーは義務に関わる厳しくてややこしい忠告を聞くことになった。今度はラーマーが出て行く姿に、父への愛情故に先生にぶたれに行かなければならなくなった生徒が持つような、悲しげなやるせなさが感じられていた。

今度は出て行ったら帰って来ることなどできなかった。随分経ってから知ったのであるが、ラーマーは病気になって家で伏せていたのだった。母はお金を送り、戻って来るように手紙を書いたが、彼が生涯で私たちと付き合うのはそこまでという定めになっていたようだった。

私たちはおもちゃを皆置いて、虚ろな目で外を見ているようになった。弟は七つの海を越えてみたいと思っていたのに、空飛ぶ馬が手に入らずに旅行は延期になっていた。妹は自分の列車で世界一周旅行に出たいとうずうずしていたが、緑と赤の信号旗を出してくれる人がいなくては、進むのも止まるのもかなわぬことだった。私は人形の結婚式をすることになっていたのだが、お坊さんであり仲人でもあるラーマーがいないので目

出度い結婚の儀も延期されたままになっていた。

兄弟の四番目となる弟は二歳半になり、私たちの作るものを繰り返し壊すのにどんどん夢中になっていった。弟をおもちゃの真ん中に座らせて私たちは皆で代わる代わるラーマーのお話しを聞かせ、最後に言うのだった、ラーマーがバラ色のターバンを巻いて杖を持って帰って来たら、お前はおいたはできなくなるよ。しかし私たちのお話しの結びのために、ラーマーは決して帰って来ることもなかった。

いま私は大きくなり、王様と呼ばせていた我がままを夢のように感じるようになり、子供のころのお話が作り話のように思え、おもちゃの世界の素晴らしかったことも幻となったが、ラーマーのことは今でも事実であり、美しく、忘れられないことである。私の過去にあるラーマーの大きな影は現在も広がり続けている—言葉もなく、眠ることもないが、愛情に溢れている。

原題 'rāmā' (atīt ke calcitra より)

バクティン

小柄で痩せたバクティンが、薄い唇の端に気の強さと、小さな目に不思議な思慮深さを備えて初めて私のところへやって来た日から今日まで、とても長い時間が経った。しかし誰かが好奇心を起こしてこのことについて尋ねると、彼女は目を細めて、神妙な面持ちで顎を幾分上げて、確信に満ちた声でこう言うのだ—「そうだね、何て言おうかね。五十年くらいになるかねえ」この計算でいけば私は七十五歳になり、彼女も百歳を越えるのだが、このことにバクティンは気づいていないのだ。気づいていたとしても、きっと彼女は私と過ごした時間をほんの少しも短くしたくはないのだろう。もうあと数年経てば、彼女は私と共に過ごした時間を百年にまで伸ばすだろうと私は確信を深めつつある。その計算でいけば、たとえ私が百五十という無茶な年齢を背負わねばならないとしても。

奉公にかけてはハヌマーンに匹敵するほどのバクティンだが、アンジュナー（ハヌマーンの母）の娘などではなく、名もない牛飼い女の娘で、名前をラチャミンすなわちラクシュミーという。しかし名前の荘厳さが私にとって重荷であるのと同じように、富の女神ラクシュミーの財宝はバクティンには運命づけれられていなかった。もっとも人生においてはたいてい誰もが自分の名前の矛盾を抱えて生きていかなくてはならないものだが、バクティンは大変頭が良い。というのは彼女は富を意味する自分の名前を誰にも言わないのだ。ただ仕事を探してやって来たときだけ、真面目さを示すために他の経歴とともに名前も言ったのだが、同時に私には決してこの名前を使わないようにと頼んだ。別名を付ける才能があれば、私はまず最初にそれを自分のために使っているはずだが、田舎者の女はこの事実を知る由もなく、首にかかった数珠を見て私がバクティン（信心深い女）と名付けると、そんな味気ない名前でも喜んだ。

バクティンの人生の経歴を知らずに彼女の性格の全てはおろか、部分的にさえ理解するのは難しいだろう。彼女は歴史的に有名なジューンシー村で名を馳せたアピール（牛飼い）のスールマーの一人娘であっただけでなく、後妻に散々に可愛がられて育った。五つのとき、父はハンディヤー村のとある裕福な牛飼いの末っ子との縁談をまとめて、教典の定めより二歳早いと評判になった。継母は九つのときに嫁入りをさせ、嫁いで夫のものとなるべく生まれて来た娘を、言われる前から夫に差し出して、太っ腹なところを見せた。

父は彼女を底無しに愛していたので、元々嫉妬深かった継母は、財産を守るために悪知恵を働かせ、父が危篤であるという知らせを継母が寄越したときには、同時にそれが死去の知らせにもなっていた。泣いたり悲しんで胸を叩いたりと縁起の悪いことをされては困るので姑も彼女に何も教えなかった。長い間実家に帰っていないから、行っておいでと言い、姑は身支度をさせ、送り出した。こんな優しい気遣いは今までになかったので、彼女は足に羽根が生えたかのように飛んで行ったが、村の入り口まで来るとその羽根はもがれた。

「あぁ、ラチャミンが今頃帰って来た」とはっきりとは聞こえないが口々に言われ、はっきりと気の毒だと言っているような視線に押されて彼女は家までやって来た。しかしそこには父は影も形もなく、継母の振る舞いには母親らしさのかけらもなかった。悲しみに呆然とし、侮辱されて怒った彼女は実家では水も飲まずにそのまま婚家へと踵を返した。彼女は姑を罵って継母への怒りを鎮め、身につけていた腕輪や首飾りを夫に投げ付け、父との永遠の別れのつらさを紛らした。

人生の第二章も幸福より不幸の方が多い。彼女が色の浅黒い、スリコギのような顔をした長女と同じような娘をもう二人産むと、姑と兄嫁たちは唇を歪めて、あからさまに嫌った。姑は稼ぎのある息子を三人産み、床の間に座り、家刀自の地位に就いていて、兄嫁は二人ともカークブシュンディー[13]みたいに色の黒い息子を次々に産み、この地位を狙っていたのだから、それは当然のことでもあった。末の嫁は掟を破ったのだから罰を受けるのは仕方がなかった。

兄嫁たちは座って世間話をし、色黒の息子たちは暴れまわる。彼女はバターミルクを掻き混ぜ、穀物を砕いて挽き、煮炊きをし、彼女の幼い娘たちは牛糞を拾って来て、捏ねて燃料を作る。兄嫁たちは自分の飯には白い糖蜜をのせて濃い牛乳をかけ、息子たちには沸かした牛乳からクリームをすくって食べさせる。彼女は黒砂糖の塊と皿にバターミルクをもらい、娘たちはヒヨコ豆と粟を油で炒めたものを何度も噛みしめて食べるのだった。

こんなにひどくいびられていても、不良貨幣を製造した造幣局の如き妻に夫が愛想を尽かすことはなかった。悪口も陰口もみな結局、夫の愛情を深めるばかりだった。兄嫁たちは事あるごとにひどくぶたれていたが、彼女の夫は指一本上げることはなかった。夫は彼女が誇り高い父の娘らしく誇り高いということをよく分かっていた。その上働き者で、利発で、夫には全身全霊で尽くす妻を夫もとても愛していたのだろう。というのも彼の愛情のに支えられてこそ、妻は分家して皆の鼻をあかしたのだから。仕事をするのは彼女自身だったから、牛や畑仕事、マンゴー園の木のことなどについて、随分詳しかった。彼女はよく吟味して、表向きは不満そうな顔をしつつ内心はほくそ笑みながら手に入れたものは、最上のものであり、同時に働き者の夫婦の絶え間ない骨折りのお陰でひと財産できるのも当たり前のことだった。

盛大に長女の結婚式を行った後、ままごと遊びをしている二人の娘と家の切り盛りという大変な重荷を二十九歳の妻に残して、夫はこの世を去った。死んだとき夫は三十六歳を少し越えるぐらいだったが、妻は彼のことを思い出すときは爺さまと呼ぶのだ。バクティンは、自分が年をとり夫も天国で年をとっているだろうから、爺さまと呼ばないのはひどく失礼なことだと考えているのである。

バクティンの青々とした畑や肥えた元気な牛たち、たわわに実がなっている木を見て、兄夫婦たちは当然喉から手が出るほど欲しがった。末の嫁がよその家に行ってしまわな

[13]聖者に呪いをかけられカラスの姿にされた、ラーマの信徒。

いかぎり、これらは全て手に入らなかった。しかし生来の「出来損ない」であるバクティンが彼らの罠にかかるはずもなかった。彼女は怒って、中庭を地響きさせんばかりに足を踏み鳴らして言った—「あたしゃ犬や猫じゃないんだ。その気になればよそへでも行くよ。そうでなきゃあんたらをさんざん苦しめて、好きなようにやらせてもらうよ。分かったかい」

彼女は舅、父方の伯父、舅の血筋の者たちが何世代にも渡って受け継いできた土地を僅かたりとも分け与えるような気前のよさは見せなかった。その上僧侶からお経を唱えてもらって得度し、夫に操を立てるといって、油で艶やかにしていた髪を剃髪して、自分が決して退かないことを宣言した。将来も財産を守っていくために、下の娘たちも結婚させて婚家に送り出し、夫が選んだ長女の婿を養子にとった。このようにして彼女の人生の第三章が始まったのである。

バクティンの不運はそんなことでは終わらなかった。それどころか長女までもが少女から娘になった途端に未亡人になった。末の嫁にはかなわない義兄と伯母をやりこめようと必死になっているその息子たちに、一筋の希望の光が差した。未亡人になった従姉妹にくっつけようとして伯父の一番上の息子はウズラの闘鶏にうつつをぬかしている、妻の弟を呼んできた。彼が主人になれば、全て自分たちの思うままになるからだ。バクティンの娘も母に劣らず知恵者だったので、婿を拒絶した。外から娘に婿が入って来るのは父方の従兄弟たちには都合が良くなかったので、この案は保留になった。そこで母娘は財産の管理を始め、「来た人はともかく客と思え」という諺を地で行こうとする婿を応援する者たちは、何とかして彼を夫の地位に就かせる手立てを考え始めた。

ある日、母の留守中に婿殿は娘の部屋に押し入り、中から戸を閉め、自分の味方である村人たちを呼んだ。アヒールの娘はこの強盗婿をぶって鎖を解くと、哀れにも五人の人間がこの事件に巻き込まれることになった。ウズラ狂いの若者は誘われて中に入ったのだと言い、娘は婿の顔についた五本の爪跡に誘ったという言い掛かりの真意を読んでくれと訴えた。結局白黒をつけるためにパンチャーヤト（五人の村人による話し合い）が開かれ、皆が途方に暮れてこの事件の根本的な原因は末世にあると承認した。もしどちらかが本当のことを言っているとしても、両者とも嘘をついているとしても、一つの部屋から出て来た以上、二人は夫婦として暮らす以外に、この末世において罪を滅することはできない、という控訴審なしの判決が下された。辱められた娘は血の出るほど唇を噛み、母は厳しい目付きで歓迎されざる婿を睨んだ。今では婿は呑気にウズラを闘わせ、娘はやり場のない怒りに震えていたので、関係は少しも良くならなかった。これほど苦労をして守ってきた家畜や畑がすっかり一族の間の憎しみのせいで消え、小作料を払うことすら負担となり、楽に暮らすどころではなくなってしまった。揚げ句には小作料を送ってこないので地主がバクティンを呼び出し、一日中厳しい日差しの中に立たせておくようなことまで起きた。この侮辱は働き者の彼女にとって最大の汚点となり、すぐ次の日からバクティンは働き口を求めて町へやって来た。

髪を剃り落とした頭のてっぺんを厚く汚れた腰布で覆って、まるでどんな足音も聞き逃すまいとしているかのように片耳を出して、バクティンが私の家で奉公を始めたときに、彼女の人生の第四章、恐らく最終章が始まったのだが、その終わりはまだはるか先のことである。

バクティンは主婦と尼さんが混ざったような身なりをしていたので、私は怪しく思ってきいた—「あんた料理はできるの」返事に彼女は上唇をすぼめ、下唇を少し突き出して、任せておけというような顔をして言った—「たいそうに言うほどのことでもなし。パンの焼き方は知っとりますし、碾き割り豆のスープも煮れます。野菜料理だって作れるんだから、十分でしょ」

次の日、彼女は夜明けから壷の水で頭から何杯か水ごりをとり、洗ってある私の腰布に水滴をはじいて清めて着、東の方の暗闇と、壁の向こうから差し込む日の光、そして菩提樹に壷に二杯の水をかけて拝んだ。しばらく鼻をつまんでお祈りの文句を唱えてから、炭の太い線で自分の領土を決めると台所に入った。そのとき、私はこの使用人といることは大変なことだと知ったのである。私はいつも自分の食べるものに関しては構わないのだが、料理の知識にかけては家族の間でも有名である。それに料理が上手な人というのは皆、他人のやることにあら探しをせずにはいられないものだ。しかし浄不浄にこだわる人々はしばしば飢え死にすることがあるのを思い出し、バクティンの疑い深い眼差しの奥に来るなという気配を感じ取ると、炭で書かれた線は私にとってラクシュマナの弓で引いた線[14]のように越え難いものとなった。仕方なく自分の部屋に戻り、布団に寝転んで鼻の上に開いた本を乗せて、台所の椅子に座っている身の程知らずのバクティンを忘れようと努めた。

食事のとき私が自分の陣地の決められた場所につくと、バクティンは嬉しくてたまらないといった目をし、満足した笑顔で私の花柄の皿に厚ぼったい、黒い斑点のあるパンを四枚のせ、皿を傾けてどろどろの豆のスープをよそった。しかし彼女の弾む気持ちに水を差すように、私は涙声で「これ、何なの」と言うと、彼女はうろたえた。

「パンをよく焼こうとしてちょっと焼き過ぎちまったけど、まあおいしいって。野菜料理も作ったけど、豆のスープを作ったし、いらないと思って。夕方は豆のスープじゃなくて野菜料理を作るから。ご主人様は牛乳やバターはお好きじゃないからね。そうじゃなかったらみなうまくいったんだけど。これで足らなかったらアマチュール[15]と唐辛子でチャツネを作るよ。それでもだめなら、村から持って来た包みから黒砂糖を入れよう。町の人だからって大したごちそうを食べているでもなし」とはいっても彼女が無知なのでも下手なのでもない。舅、父方の伯父、父方の姑たちは口々に彼女の料理の上手さには太鼓判を押していたのだから。

バクティンのこの説得力のある講釈の影響で、私は甘いものに興味をなくし黒砂糖抜

[14]ラーマーヤナにおけるエピソード。ラクシュマナ王子が兄嫁のシーター妃を一人置いて出掛けるとき、彼女を守るために周りに弓で線を引く。その線を彼女が越えない限り、誰も近づけない。
[15]マンゴーを乾燥させた粉末。スパイスとして碾き割り豆のスープや野菜料理に入れる。

きにし、バターが嫌いなので油抜きの豆のスープに厚ぼったいパン一枚食べて意気揚々と大学へ行き、ニヤーヤ・スートラ[16]を読みながら、都会と田舎の生活の違いについて考察するのだった。

自分の健康が衰え、家族の者たちも心配していたので、食事の用意を別にしなければならなくなったが、結局は何とかする必要すらなくなった。この田舎者の婆さんは、便利さを求めることはおろか、不便だと思っていても隠すようになるほど、質素な生活に私を目覚めさせてくれたのだ。

その上バクティンは他人を自分の思うとおりにしようとするが、自分自身についてはどこか変えるなど想像すら出来ないような性格になってしまっていた。そのおかげで私は今や随分田舎者になったのだが、彼女の方は都会の風にかぶれることもない。夜作ったトウモロコシの粥は朝にはバターミルクで良い匂いがしている。ゴマをかけて作ったキビの団子は熱いのはあまりおいしくない。モロコシの炒った穂の青い種のキチュリー[17]はいける。白いマフアー[18]のラプシー[19]には世界中のハルワー[20]だって及ばない。などと彼女は私に実際に作って教えてくれるのだが、このあたりのラスグッラー[21]ですらバクティンの歯の抜けた口に食べてもらえなかった。私が一日中うるさく言っても彼女はきれいな腰布を着けることを覚えないくせに、私が自分で洗って広げておいた服を畳むと言ってはしわくちゃにしてしまうのだ。彼女は私に自分の国の言葉の物語をたくさん覚えさせたのに、呼ばれると「へえ」ではなくて「はい」と言う行儀すら身につかない。

バクティンは好人物である、と言うのは難しいだろう。なぜなら彼女に欠点がないわけではないのだから。彼女は正直者のハリシュチャンドラ[22]にはなれななかったが、かといって「人間か象か」[23]と口では言うものの平気で嘘をつくのでもなかった。そこらに置きっぱなしにしていた私のお金が、どういう訳で蔵の中のどの瓶に入ることになったのかという秘密もバクティンが握っている。しかしそのことについて誰かが指摘すると、途端に議論を吹っかけ、どんな弁がたつ人でも彼女を納得させることはできないのである。ここは自分の家も同然、そこらに金が落ちていたから、拾っておいたんだよ。これが泥棒だっていうのかい。彼女の人生の最大の義務は私を喜ばせることである—私が怒るかもしれないようなことは真っすぐに言わないで、いいように言うのである。それを嘘つきだって。このくらいの泥棒や嘘は閻魔大王だってやってるにちがいないよ。そう

[16]ニヤーヤ・シャーストラ（法律書）のもととなる書物。紀元前4世紀に編纂。
[17]米や碾き割り豆などを一緒に炊いたもの。
[18]イリッペの木。薄黄色の花をつける。花は酒の材料となる。
[19]インドの菓子。バターの少ないハルワー
[20]インドの菓子。小麦粉、ヒヨコ豆の粉、ニンジンなどをバターで揚げ、砂糖水の中で熱して水分をとばして作る。
[21]チーズを球形にしてバターで揚げ、砂糖水に浸した菓子。
[22]トゥレーター期の日種族28代目の王。寛大さと言を守ることで有名。
[23]マハーバーラタにおけるエピソード。パーンダヴァ族が敵ドローナを倒すための戦略で、アシュヴァッターマー（ドローナの息子の名）と名付けた象を殺して、嘘をつかないことで有名なユディシュティラ王子が「アシュヴァッターマーが殺された」と叫ぶ。その後、動転し、戦意を失ったドローナに聞こえないように小声で「人間か象かは知らないが」と付け加える。

でなきゃ神様の機嫌をとったり、世の中を成り立たせることができるものか。

聖典に関わる問題もバクティンは自分の都合の良いように解決する。私は女性が頭を剃るのは感心しないので、バクティンを止めた。彼女は強い語調で、聖典に書いてあるのだと答えた。興味をそそられて私はきいた—「何て書いてあるの」すぐに返事が返って来た—「聖地へ行ったら頭を丸めろ」どの聖典にこの秘密めいた文があるのか知ることは、私には不可能だった。それで私は引き下がって黙っており、バクティンの剃髪式は、木曜日毎に貧しい床屋の、ガンジスの水で清められた刃によって形式どおりに行われるのだった。

しかし彼女が愚かであるとか、知識や知恵の大切さを知らないとか言うのもまた真実ではない。自分に学がないことを私の研究と執筆の仕事を自慢することで埋め合わせているのだ。あるとき私が働いている者皆に拇印の代わりに署名をする決まりを作ると、バクティンは大変困った。というのはひとつには勉強などという面倒なことはたまらない、もうひとつは御者や乳母たち皆と一緒に並んで勉強することは年長者である彼女にとって侮辱だというのである。それで彼女は「うちのご主人様は一日中本の中に埋まっておられる。それであたしらまで勉強しだしたら、誰が家のことをやるんだろ」と言い始めた。

教える側も教わる側もこの理論に影響され、バクティンは視学官と同じように教室中を歩き回って、誰々のア、イが間違っているとか、誰々は手の動きが遅いとか、誰々は頭が鈍いとか口出しする権利を得た。彼女は拇印を押して給料をもらうことになっていなかったので、自分は勉強もせずに、勉強している者たちの教師になってしまった。彼女は自分の理屈だけでなく、屁理屈についても論拠を探し出すのに長けていた。自分を偉く見せるためだけに、主人が並外れていると見せようとしているのだが、そのためにも論拠を探さなければならなくなる。

あるとき私が答案用紙と絵の仕事を抱えて忙しかったとき、バクティンは皆にこう言って回った—「可哀想にご主人様は一日中仕事にかかりっきりだよ。なのにあんたたちときたらぶらぶらしてからに。ほらほらちょっとは手伝ったらどうだい」皆この種の仕事は他人が手伝えるものではないと知っていたので、自分には無理だと言ってバクティンには関わらないことにした。たったこれだけのことを根拠に「ご主人様の仕事を分かっている奴は誰もいねえ。だから声をかけても誰も手伝う勇気がねえんだ」という彼女のおおげさな話はアマルベーリ[24]の如く広まった。

といっても彼女自身が何か手伝えるわけではないのだが、それを認めることは自分が劣っていることを認めることだった。それで彼女は戸口に座って何度も何か用を言い付けろと言い張るのだった。時には答案用紙をまとめたり、途中になっている絵を隅に寄せたり、また絵の具の水入れを洗ったり、ゴザをサリーの裾で払ったりして、手伝いらしいことをして、それによってバクティンが他の人よりずっと賢いということが証明され

[24] スナヅル

るのだ。他の者が私の手伝いをすることを思いつきさえしないときに、自分は手伝いたいという気持ちを行動に表すことができるということを彼女は知っている。だから何か私の本が出版されると、スイッチを入れると電球の中に隠れていた光が輝き出すように、彼女の顔に喜びの光が輝くのだ。彼女は人のいないところで何度も本を触ったり、目の真ん前に持って来てまるで自分の手伝った跡を探すかのようにくるくる回して見るのである。彼女の目付きには自分は報われたのだという満足感がはっきりと窺える。これは当たり前のこととも言える。私が何か絵を仕上げるのに忙しくて、何度言われても食事のために席を立たないと、彼女はヨーグルトのシャルバット[25]やまたあるときはバジルのお茶を私のところまで持って来て、空腹に耐えるのを放っておかないのだから。

一日の仕事の重荷から解放されて私が何か論文を仕上げようか、あるいは詩でも作ろうかと腰かけるころには、学生の寄宿舎の明かりはもう消えてしまっていて、家(うち)の牝鹿のソーナーはベッドの足元の床に座って口をもぐもぐさせるのを止めていて、犬のヴァサントは小さな椅子の上で足の上に顔を置いて目を閉じ、猫のゴードゥーリーは私の枕の上に身を縮めて眠ってしまっている。

しかし夜の静寂の中に私を一人で放って置かないようにと片隅のマットの上に座って、電灯のきらめきに目を瞬(しばた)かせながらバクティンは物静かに起きているのだった。彼女は居眠りさえしない、というのも私が頭を上げるとすぐ彼女は眠たげな目付きで私の視線の先を追うのだから。もし私が枕元の本棚のほうを見れば、彼女は必ず立ち上がって何色の本かと尋ね、私がペンを置けばインクを持って来、紙を片側に寄せると、別の書類の束を探し始めるのだった。

夜遅くに寝ても私は朝早く起きる。そしてバクティンは私よりも早く起きなければならない—ソーナーは外へ出て跳びはねたいとうずうずしているし、ヴァサントは朝の一仕事のために戸を開けてもらいたがっているし、ゴードゥーリーは鳥のさえずりを聞いて狩りに心を誘われている。

私の旅の供もいつもバクティンである。バダリーケーダール[26]などの上り下りの細い山道では彼女は断固として私の前を歩き、また同じように埃だらけの村の小道では私の後ろについて行くことを忘れない。どんな場合でも、常に、どこへ行くのでも、用意ができたと思うと、影のようにバクティンが一緒にいるのに気づく。

戦火が国境にまで伸びて来て人々が怯えると、バクティンの娘夫婦が孫を連れて迎えにやって来た。しかし、どんなに諭されても彼女には一緒に行けなかった。皆の面倒を彼女は見てやって来たのだし、仕送りをしてやっている。しかし娘たちと一緒にいるためには私のそばを離れなくてはならない。それは恐らくバクティンは生涯良しとしないことだろう。

先年の戦争の亡霊のせいで、勇気ではなく臆病風に吹かれたとき、バクティンは初め

[25]砂糖の入った飲み物。
[26]ヒマラヤにある聖地。

て使用人らしいへりくだった表情で私に村に行くように頼みに来た。ご主人様の服は、薪を置く椅子に私の新品の腰布を広げた上におくよ。本は、壁に釘を打ち込んで上に板をのせて並べる。稲藁で敷物を作って、私の毛布を広げてご主人様の寝床にするし、ご主人様の絵の具やインクなどは新しい壷に入れて、書類は網棚にきちんとまとめておくから。

「そこで暮らすだけのお金がないわ」バクティンが申し出を引き下げざるを得ないように私は言った。しかしその結果に私は驚いた。バクティンは最高機密を暴露するかのような面持ちで、歯の抜けた口を私の耳元に近づけて、百五ルピー貯め込んでいるのだとこっそり教えた。その金で彼女は全て用意するだろう。それに戦争などいつまでも続くわけでない。全てうまくおさまればここへ帰って来ればいい。バクティンのけち精神が溜まって金の山となっていたが、この気前の良い爆弾で一瞬のうちにそれを吹っ飛ばした。額はたいしたものではなかったが、しかし金に対するバクティンの執着は皆よく知っていたので、そのことで彼女がどれほど私を大切に思っているか分かった。

バクティンと私の間は使用人と主人の関係であると言うことは難しい。なぜなら使用人を首にしたいと思っているのにできない主人などあり得ないし、主人から出て行くように命じられても笑い飛ばして無視するような使用人も聞いたことがないからだ。バクティンを使用人と呼ぶのは、家(うち)に繰り返し行き来する暗闇や陽光、庭に咲くバラやマンゴーを召使だと考えるくらい不自然なことである。そういったものが独自の存在感を持ち、我々を喜ばせたり、悲しませたりして、存在の意義を知らせているように、バクティンの独特な個性はその成長ぶりを知らしめるために私の生活を取り巻いているのだ。

家庭と環境のせいで彼女の性格には頑ななところがあるが、その奥から優しさと思いやりの光が差している。それで彼女に接する人は、彼女の中に人間が生まれながらに持っている一番大切なものに気づくのである。寄宿舎の女生徒の何人かはお茶を入れてもらいに彼女の台所の隅に入り込んでいるし、牛乳を沸かしてもらいに戸口に腰かけている娘たちもいる。何人かは外に立ち、私のために作った食事の味見をして、味の批評をしたりしている。私が外へ出た途端に皆鳥のように飛んで行き、家へ入ると元の場所に戻って来る。あの娘たちがやって来る邪魔にならないようにバクティンは二度の食事を朝早くに作って上の棚に置いておき、食べるときは台所の片隅を洗って、浄不浄の昔からのしきたりと妥協しているのだ。

私の知人や物書きの仲間たちもバクティンはよく知っているが、どれだけバクティンが彼らを尊敬するかは、どれだけ彼らが私を尊敬しているかによるし、どれだけ彼らに対して好意を持つかは、どれだけ私が好意を持っているかによって決まるのだ。こういったことを見抜くバクティンの才能は驚くべきものである。

彼女は容姿や服装で覚える人もいるし、また名前を崩したりして覚える人もいる。詩と詩人に関する知識は深まったが、敬意はない。長髪やだらしない服装の人を見るとこう言うのだ—「あの人も詩を書くのかね」そしてすぐにあからさまに軽蔑して—「とい

うことはあの人は何もしてないんでしょ。ただ楽器を弾いたり歌を歌ったりしてるだけでしょ」

しかし人の不幸には彼女は胸を痛める。とある学生が牢獄に入れられると、その知らせに悲しんでバクティンは「あの若いみそらで刑務所なんて。末世なのは知ってたけど、もう世も終わりだね—あの子のおっかさんも総督さまといっちょ戦わなくちゃ」などと言って一日中皆を困らせるのだ。ガーンディーから一般人に至る全ての人に対してバクティンは同様に同情心を持っている。

閻魔大王の国を恐れるのと同じように、牢獄を恐れるのが、バクティンの習い性となっている。高い塀を見るなり、目を閉じて気絶してしまいそうになる。彼女のこの弱点はあまりに有名になってしまい、人々は私が牢獄に入るかもしれないと言って彼女をからかっている。彼女が恐れていないと言えば嘘になるだろうが、恐れるよりも大事なのは私のそばにいることなのである。こっそり私に尋ねるのだ。ご主人様があっちであたしのせいで恥をかかないように、あたしの腰布を何枚か石鹸で洗っておこうか。あちらで何の不便もないように、どんなものを用意しておけばいいかねえ。こういう旅には同行することは許されないのよ、こんな慰めもバクティンには何の意味もない。彼女は私が行かないことを想像して喜ぶ以上に、自分が一緒に行けないかもしれないと考えて侮辱を感じる。こんなめちゃくちゃな話があるだろうか。主人あるところ、使用人あり—主人を連れ出して監禁してもそれほど罪にならないが、使用人を一人で引き離しておくことは大変な罪だ。このような不正な目にあってはバクティンは総督さまと戦わざるを得ないだろう。誰かの母親が総督さまと戦わないなら、それはそれとして、バクティンの場合は戦わずにはすまない。

こんな不釣り合いな勝負は想像すらし難い。

私はいつも考えるのだが、召喚状が来たときには、腰布をきれいにしたり荷作りをする暇はないし、バクティンに自分が留まったり、私を引き留める権利は認められないだろう。その永遠の別れの最後の瞬間にこの田舎者の婆さんはどうし、私はどうするだろう。

バクティンの物語りはまだ続いている。しかし彼女を失ってこれを完結させることだけは私はしたくない。

原題 'bhaktin' (smṛti kī rekhāẽ より)

使用テキスト　*Mahādevī Varmā Pratinidhi Gadya Racnāẽ*, Bhāratīya Gyānapīṭh, Delhi, 3d ed., 1990

マハーデーヴィー・ヴァルマー

１９０７年、ウッタルプラデーシュ州ファルルカーバードに生まれる。チャーヤーヴァード時代（１９２１～１９４０）の代表的詩人であると同時に画家としても有名である。１９２９年、アラハバード大学にて文学修士号取得。１９３２年に、Prayāg Mahilā Vidyāpīṭh に職を得る。同じ頃、ヒンディー語月刊誌 Cāmd の編集に携わる。１９３５年にカルカッ

タで開かれた日本の詩人野口米次郎の歓迎式典に参加。１９５４年、デリーで設立されたSāhitya Akādmīの創立委員に選ばれる。各種文学賞を受賞。１９８７年死去。

作品には

詩集

Nīhār (1930)

raśmi (1932)

nīrjā (1935)

sāndhyā (1936)

dīpśikhā (1942)

散文作品には

atīt ke calcitra (1941)

smṛti kī rekhāẽ (1943)

path ke sāthī (1956)

merā parivār (1971)

などがある。

訳・注　　松木園　久子　（大阪外国語大学大学院）